雷鳴

ちいめい

佐伯泰英

交代寄合伊那衆異聞

|著者|佐伯泰英　1942年福岡県生まれ。闘牛カメラマンとして海外で活躍後、国際冒険小説執筆を経て、'99年から時代小説に転向。迫力ある剣戟シーンや人情味ゆたかな庶民性を生かした作品を次々に発表し、平成の時代小説人気を牽引する作家に。「密命」「居眠り磐音江戸双紙」「吉原裏同心」「夏目影二郎始末旅」「古着屋総兵衛影始末」「鎌倉河岸捕物控」「酔いどれ小籐次留書」など各シリーズがある。講談社文庫では、『変化』に続き、本書が「交代寄合伊那衆異聞」シリーズ第2弾。

雷鳴（らいめい）　交代寄合伊那衆異聞（こうたいよりあいいなしゅういぶん）
佐伯泰英（さえきやすひで）
© Yasuhide Saeki 2005

2005年12月15日第1刷発行
2006年 5 月 2 日第3刷発行

発行者――野間佐和子
発行所――株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン―菊地信義
本文データ制作―講談社プリプレス制作部
印刷――中央精版印刷株式会社
製本――中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-275270-0

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

雷鳴

交代寄合伊那衆異聞

佐伯泰英

講談社

目次

第一章　奥傳伝授　7
第二章　軽業栄次郎　70
第三章　洲干島の唐人　134
第四章　陽炎の女　201
第五章　北辰落つ　266
解説　小椰治宣　338

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

交代寄合伊那衆異聞

雷鳴

第一章　奥傳伝授

一

この冬一番の寒気が江戸を襲った。池の水どころか神田川の岸辺まで凍てついた。
安政二年（一八五五）霜月半ばのことだ。
座光寺左京為清は足先が痺れ、それを我慢していると眠気が襲ってきた。それでも眠りに落ちまいと必死で我慢した。
ここは高田村大鏡山医王寺南蔵院の離れの一室だ。
片桐朝和神無斎の論語の講義を淡々と説く声が遠のいていく。ついには
すとん
として左京為清の意識は途絶えた。

雪が霏々として降る伊那谷の光景が脳裏に浮かんでいた。山も川も押し包むように降り続け、ついには伊那谷を白一色に変えた。

若者が独り、天竜川に向かい合うように木刀を振り続けている。その向こうには一万尺を越える山並みは雪の壁に掻き消されていた。

直参旗本座光寺家は交代寄合衆と呼ばれ、万石以下の禄高にも拘わらず参勤交代を義務付けられた家柄だ。所領はわずか千四百十三石、城はなく陣屋は伊那谷山吹領にあった。

若者が木刀を振るう野天の道場は、前方に暴れ川の天竜川と伊那山脈を眺められる山吹台地にあった。伊那山脈の背後に白根岳や赤石山嶺が天を衝く衝立のように聳えていた。

若者は座光寺一門に伝えられる信濃一傳流をさらに創意工夫した独創の剣を編み出さんと太く、長い木刀を構えて縦横無尽に雪の原を走り回っていた。

若者が独創した剣は大雨の後、滔々と激しく流れ下る天竜川に啓示を受けたものだ。諏訪湖から流れ出た川には東西の谷から無数の雨水が加わり、広い河原を埋めて奔流した。

若者は暴れる川が岩場に当たって砕け、流れを思わぬ方向に転じ、砕け散る様から

秘剣、
「天竜暴れ水」
と名付けた。
天竜暴れ水は奔る流れが瀬や岩にぶつかり、人間の予測を超えて四方八方に転流するように対戦者に予測さえ与えないほどの動きを見せる、電撃乱戦の剣捌きだった。
若者はまず師の教えを守り、気宇壮大に相手を呑むために構えは天竜にも白恨岳にも負けぬように大きくとった。
若者が動かんとしたまさにその瞬間、膝をぴしゃりと扇で叩かれ、目を覚ました。
「おおっ、これは」
目の前に剣術の師にして座光寺家の陣屋家老の片桐神無斎の顔があった。
「師匠、迂闊にも」
と平伏して詫びようとした藤之助は、はたと急転した宿命に気付き、
「朝和、つい居眠りしてしもうた。相すまぬな」
と言い直した。
「四書五経の講義は退屈にございますか」
「剣術とは比較にならぬな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

座光寺家の中興の臣と敬われる神無斎が笑った。

二代前の忠之助為将の代に伊那谷を大凶作が襲った。そのため座光寺家では多額の借財を負ってなんとか領内の暮らしを保った。

その折、若き日の片桐朝和は所領地の山吹と江戸を頻繁に往復して家中に殖産を督励し、江戸藩邸に質素倹約を説いて財政を立て直した。

この功績により、朝和は中興の臣と呼ばれるようになっていた。

六十二歳の高齢を押して神無斎が伊那谷から江戸に出てきたには事情があった。

座光寺家十二代左京為清は数日前まで本宮藤之助と呼ばれ、座光寺家でも下級の奉公人であった。家臣の身でありながら、藤之助は、座光寺家に高家肝煎品川家から養子に入った左京為清と対決して暗殺し、主の座に就いたばかりだった。

むろん片桐朝和神無斎ら座光寺家の重臣らの命を受けてのことだ。

殺された左京為清は遊興に溺れ、座光寺家の暮らしを逼迫させたばかりか、家康公以来座光寺家に与えられた、隠された使命を己の利欲に使おうとした。

そのため片桐朝和、江戸家老引田武兵衛ら限られた股肱の臣は亡き先代正室、お列と計らい、座光寺家を守り抜くために主の暗殺を決断したのだ。

この決定に従い、命を受けたのが藤之助であり、主暗殺は密かに為された。

だが、驚くべきことに主殺しを決行した藤之助に左京為清の身代わりが命じられた。すべては片桐朝和らの手によって用意周到に企てられた主の交代劇であった。

とまれ、もはや座光寺家の下士本宮藤之助はこの世に存在しなかった。

交代寄合衆座光寺為清は十三代将軍徳川家定にお目見して公に認められた座光寺家の十二代当主となった。

「左京様、朝和は明朝、江戸を発ちまする」

「伊那に戻るか」

徳川家と約定した密命を守るために主の首の挿げ替えを無事果たし、家定とのお目見を無事済ませた老臣は伊那に戻るといっていた。

「もはや朝和が江戸に出て参る機会はございますまい。これからは左京様ご一人の手の内に座光寺家の命運は握られております。われら、座光寺一族は家康様との約定を守り、座光寺家を隆盛へと導いていかなければなりませぬ。世は再び乱世の様相を示し始めております、幕藩体制は弱体に陥り、四方の海には異国の艦船が開国を迫って姿を見せております。左京様、座光寺家が世に打って出る好機と申せますぞ」

「朝和、左京はなにをなせばよい」

「その問いに答えられるのは座光寺為清様お一人にございます」

朝和は自ら考え、行動せよと言っていた。

「左京様、過日、座光寺家が山吹、北駒場、上平、竜口の四ヵ村千四百十三石の安堵を保証された家光様の御朱印状と家康様からの拝領の短刀、包丁正宗に隠された秘密申し述べましたな」

御朱印状は寛永八年（一六三一）三月四日に家光から二代目勘左衛門為重に与えられたものだった。以後、座光寺家では代替わりの折、家光の御朱印状と包丁正宗を揃えて将軍家に供する異例が許されていた。

このお目見を以って正式に代替わりが成ったのだ。

交代寄合衆三十四家の中でも異例の特権には次の一条が記されていた。

「万万が一徳川家滅亡危機に瀕しなば座光寺当主御介錯申付命者也」

座光寺家の当主は将軍家の御介錯を密かに命じられた一族であったのだ。ゆえに家光の御朱印状は、

「首斬安堵」

と異名があった。

包丁正宗は将軍家自身が腹を召す短刀であり、本宮藤之助の江戸出立に際し、泰山神社の神職でもあった父が貸し与えた差し料藤源次助真は、将軍家の御介錯刀として

座光寺一族に伝えられてきたのだ。

藤之助が対決して殺した「左京為清」はこの秘密を承知して策動し、片桐朝和らに始末されたのだ。

「左京様、首斬安堵にはいま一つ口伝が付されております。それを知るは代々座光寺家の当主のみ、それがしが知るは次なる経緯ゆえにございます。十一代伊奈之助為巳様が嘉永元年（一八四八）に亡くなられた際、座光寺家には後継はございませなんだ。そこで為巳様はそれがしにしかるべき養子を迎えよ、その者が座光寺一族の棟梁として相応しき者なれば朝和の口から座光寺家の首斬安堵の使命とともに伝えよ、と申し遺されました。じゃが、高家品川家から迎えた養子どのは失敗にございました」

と言うと、

「ただ今為巳様が申し遺された一条を左京為清様にお伝え申し、朝和、伊那に引き籠る所存にございます」

と宣言した。

左京は師でもある陣屋家老の顔を正視した。

「先に慶長二十年（一六一五）四月、大坂夏の陣の陣中、家康様と為重様との口約束を後に家光様が御朱印状に認めたと申しましたな、また家康様、為重様の間の口約束

は御朱印状の文言からの推測に他ならぬと申し上げましたな」
「いかにも」
「左京様、今一つ御朱印状の文言に加えられなかった家康様の命は、こうにございます……」
左京為清は姿勢を正した。
「将軍家の御介錯前に一事あり……」
片桐朝和の言葉は淡々と続いた。
伝え終わったとき、朝和は虚脱した表情を見せた。
左京為清は呆然として言葉を失っていた。
朝和は座光寺家と徳川家の秘密を嘉永元年から負って生きてきたのだ。今、左京為清に伝えて肩の荷を下ろした。
我に返った左京為清は訊いた。
「その密命の使いはだれぞ」
朝和は首を横に振った。
「存じませぬ」
「為清の前に使いなる者が立ち現れたとせよ。その命の真偽、いかにして判断するの

か」

「包丁正宗は双子刀にてこの世にもう一振り同様の短刀がございますそうな。茎は相茎、二振りの短刀の銘にて密使の真贋が自ずと知れまするそうな」

「朝和、為重様以来、われら座光寺一族に徳川家より密命もたらされたか」

「一度たりともございませぬ」

「家康様との約定、今も生きておると思うか」

「信ずることが座光寺家の生きる道にございます」

朝和神無斎が即座に答え、しばし沈黙の後、

「左京様、徳川の屋台骨は開闢以来、初めて激しく揺れ動いております。これまで二百五十余年、徳川家は安泰にございました、ゆえにわれらの出番もございませなんだ。じゃが、この激動の時代、必ずや倒幕の動きが加速されまする。その折、西の方で必ずや動きあり、徳川家と宿命の対立をなすと家康様はお考えになられた。その時、必ずや左京為清様にもう一振りの包丁正宗を持参した使いが参りましょう」

朝和神無斎は明確に言い切った。

「西の動きの中心が朝廷か」

「いかにも朝廷と家康様はご賢察なされました」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong